

襲上の空間学

3-1 フィールドワーク

エリアの選定：
原地形を示す地図を用いて、フィールドワークを行います。

襲込に連なる斜面地には、江戸につくられた数多くの寺社が見られます。
寺社は高層な市街地を避け、地形を巧みに読みこみながら、背後に自然をひかえる襲の周縁に置かれる傾向にあります。緑が多くあり、しかも眺望のきく立地条件の良い高台のエッジに置かれることにより、取や階段によってアプローチする象徴的な構成をつくりだします。

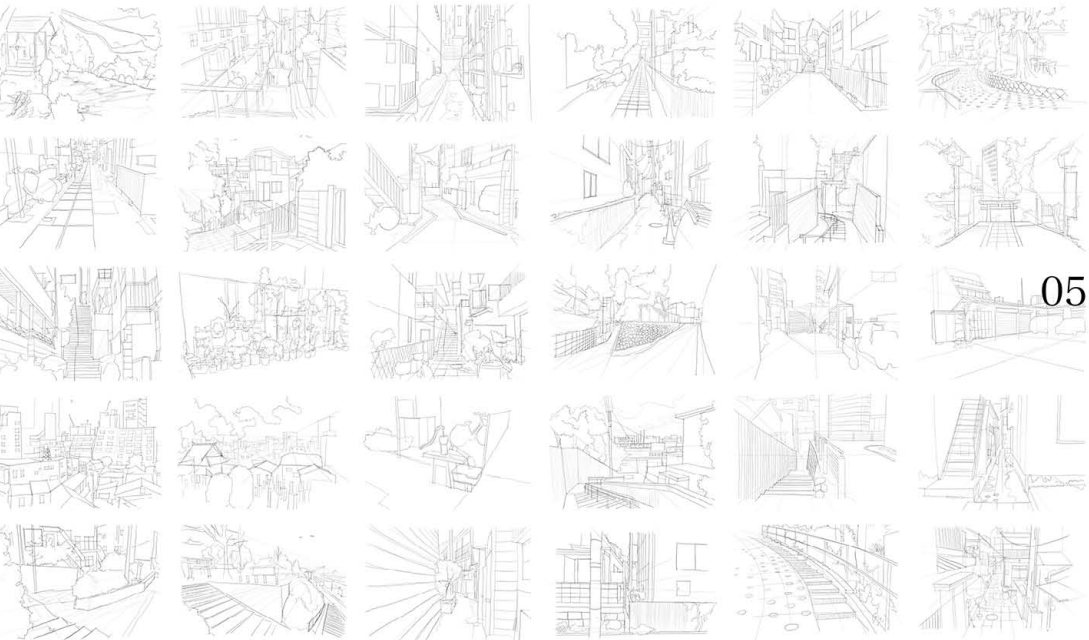
これらの寺社は、都市の防衛の役割を持つことを超えて、その門前に「盛り場」を発生させてきました。そうした空間性は今日にも継承されていると考えます。

この中から襲に位置し、かつ街区内部において、何らかの改良すべきポイントが見受けられる建築物、ないしはその街区一体について介入を試みます。



襲上の空間学 - 空間スケッチ

襲上を視察していると、近代化のパッケージから逃れるような、豊かな生活の痕跡が見えます。
都市の際といえる襲の中には、寺院や墓地などが配置され、それを取り囲むように、小さな群れとして生活空間が連なっていることがわかる。
ここには失われたと思われていた境界性が継持され、今なお都市に集まって住まう価値を残しているように感じられた。



05

プレデザイン - 逃走線を引く

4-1 本郷の地形から考える

江戸期、武家住宅の続く高台も、少し歩けばすぐにエッジの坂や崖に至り、その下の谷間には、山の手の下町ともいべき町人の世界が広がっていた。平川、溜池川、古川などの中小河川が大地に深く入り込み、起伏に富んだ地形を持っている。これらの町は、湾曲する谷間に沿いながら、襲に迫る崖までの間の狭い土地を利用して自然発生的につくられる。そうした都市組織を、小さな建築の開口をパラメーターとして再構築していく

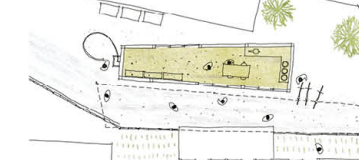
4-2 人々の集まり方から考える

私たちは昔から都市の様々な場所で生活しているのであって、その経緯の多くは都市機能に合わせています。たとえば、今日の住宅の機能はその点においてオーバースペックであり、誰ももが均質な住環境を用意し、その充実性の中で生活が閉鎖性を持つのは適当ではないと考えます。
家に求める要件を部屋のレベルにまで解けし、その組み合わせの総体として家の輪郭を得ると考えてみる。これによりそれぞれに相応しい住まいを獲得し、また相対した人数を収められることができるこの環境は、都市の人口問題への一つの解決にもなる。



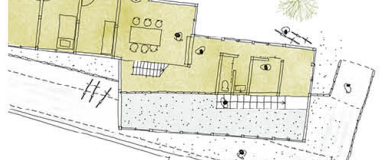
プレデザイン - 逃走線を引く

4-4 キドバン



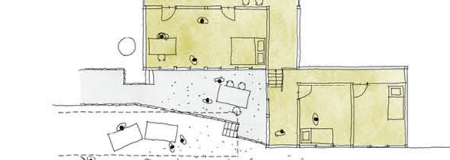
境界を牽制するように手を伸ばした案には、小さな小屋や小さな生活インフラを用意する。これはかつての木戸のように特定機能のための門となり、同時に顔の知れた近隣住民との共同利用は許容できる小さな群れとしての建築の境界

4-6 地形を中景とする



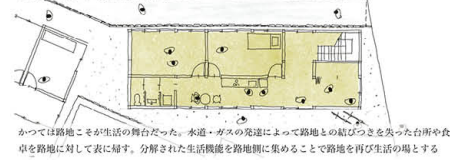
既存の擁壁や坂は立体的な都市組織として襲独自の風景をつくりだしている。これらを建築群の中景として取り込み、住まう環境の一部として再構築する

4-5 特定機能のための庭



路地・私室の先に特定機能のための小さな庭を植える。
私室が境界となり、庭には記名された関係の人々が集まって住まうための環境が強まる

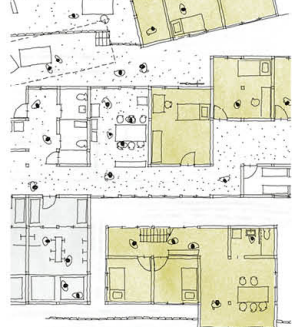
4-6 生活の場を表に帰す



4-3 手を伸ばす

リサーチより、襲上の街区は有機的な形をとり、狭小路や旗竿などの襲間向な街区形成が多く見られ、それに連なるための路地が多く見られる。設計では群の境界から建築的振作で手を伸ばし、隣接した街区への通り抜けを設けることを考える。

4-8 既存木造の路地化



既存木造住宅を減築し路地化する。路地化した建築には集まって住まう環境としての強度を担保するための銭湯やランドリー、作業スペースを設け、小さな建築の群れが一つの大きな空間としての環境を獲得する

06

07

設計 - 襲上の透明なイエ

敷地 東京都文京区本郷・菊坂周辺

昔から名前のつく二つの急坂に挟まれた連続する街区を敷地とする。周辺にはいくつかの木造住宅をはじめとした下宿や旅館が今なお残っており、学生アパートやファミリー、外国人まで多様なバックグラウンドを持つ人々が生活している。

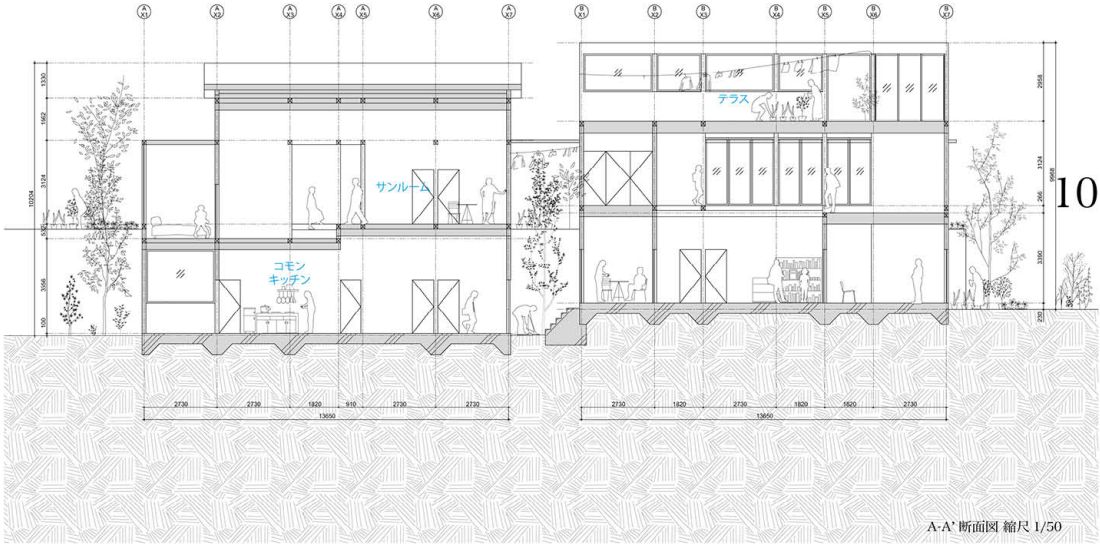


5-1 多焦点的な複数の核の連なり

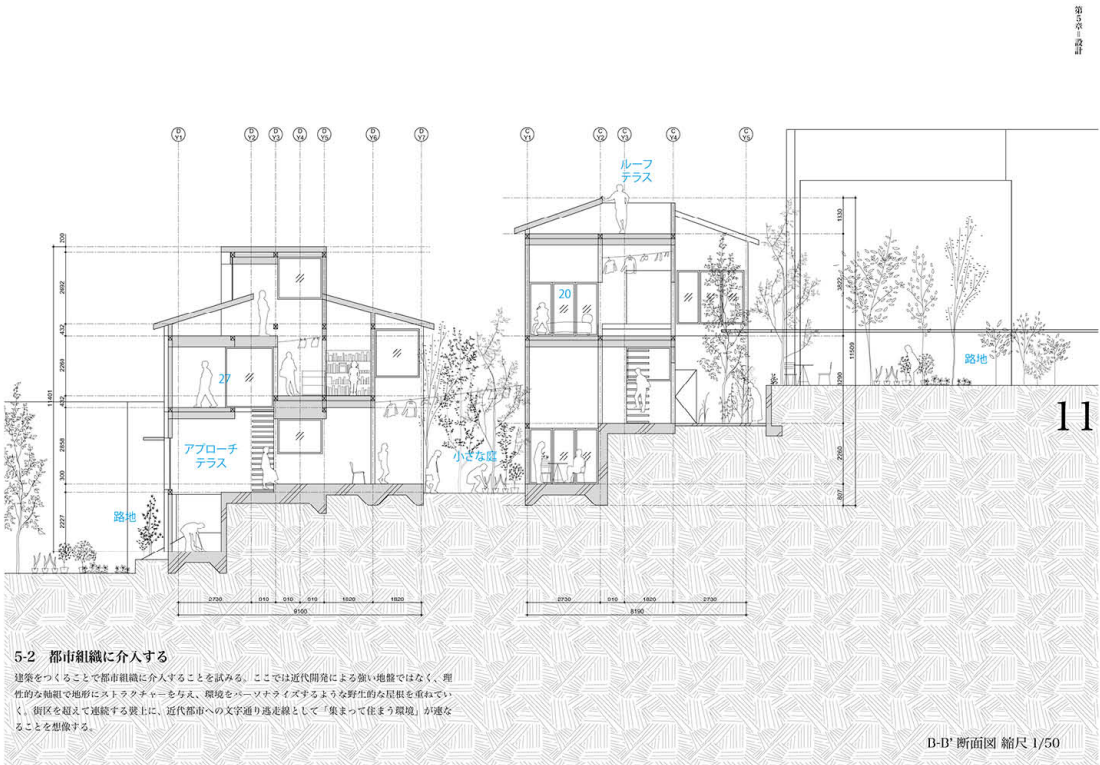
襲上の街区を穿つように小さな建築の群れを設計する。敷地境界にエンドがつけられないような連続の敷地となり。隣り合うが街区や路地に對しても設計範囲を広げていくことができるものとする。これは近隣住民にとっても相互作用的な利用を前提としており、そこで引き起こされる活動については後に述べる。またこの小さな建築の群れが設計されることにより、街区内の環境改善にも繋がるような提案となることを考える



設計 - 襲上の透明なイエ



A-A' 断面図 縮尺 1/50

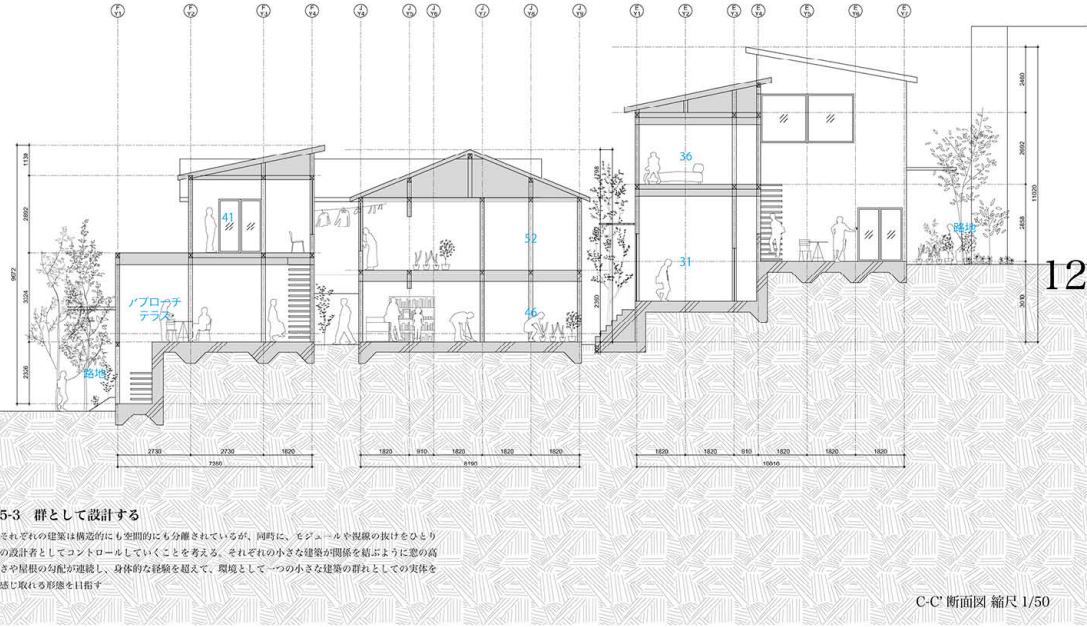


5-2 都市組織に介入する

建築をつくることで都市組織に介入することを試みる。ここでは近代開発による強い地盤ではなく、理性的な軸組で地形にストラクチャーを与え、環境をパーソナライズするような野生的な足根を重ねていく。街区を超えて連続する襲上に、近代都市への文字通り過走線として「集まって住まう環境」が現れることを想像する。

D-B' 断面図 縮尺 1/50

設計 - 襲上の透明なイエ



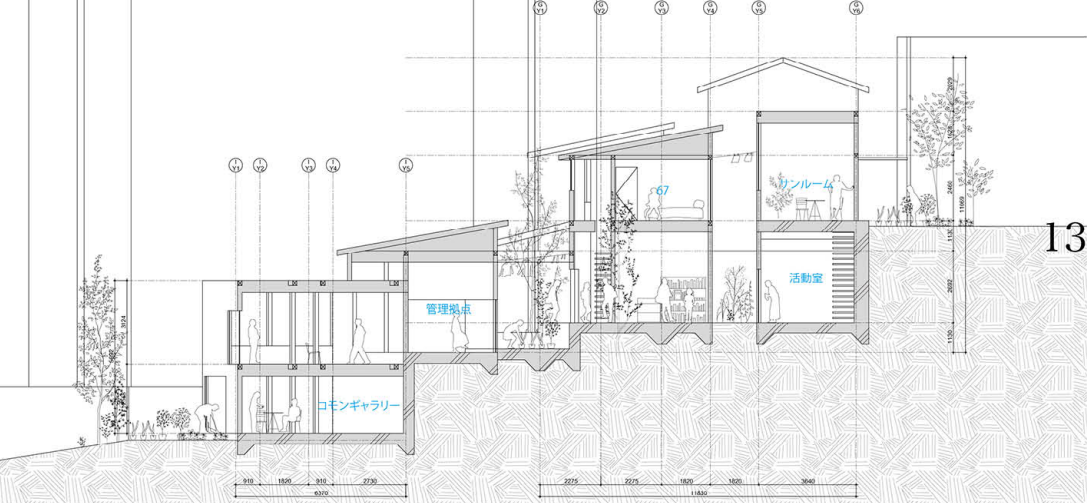
5-3 群として設計する

それぞれの建築は構造的にも空間的にも分離されているが、同時に、モジュールや視線の抜けをひもりの設計者としてコントロールしていくことを考える。それぞれの小さな建築が関係を結ぶように窓の高さや屋根の勾配が連続し、身体的な経験を超えて、環境として一つの小さな建築の群れとしての実体を感じ取れる形態を目指す

C-C' 断面図 縮尺 1/50

5-4 複数の大り口

小さな建築への入り口を高さ方向で複数設けることを考える。近代化以降、水道やガスの整備により路地裏の長屋の構造は、台所は裏側に回り、それに代わって前面には接客を意識した玄関の間が整えられた。一方江戸の頃までは路地こそが生活の舞台であり、手狭な長屋の住民は専用の庭を持たず、路地に全てを依存していた。ここではGL層を複数設けることにより、フラットプリントの性格の一つの建築の中にも複数つくりだし、路地空間を中心とした集まって住まう環境を立ち上げる



D-D' 断面図 縮尺 1/50

設計 - 襲上の透明なイエ



集まって住まう環境

終-1 襲の連なりの中で

都市と地続きな経験としての住まい、活動へのインターフェイスとしての建築そんな環境としての建築の群れを私は「襲上の透明なイエ」と名付けます。

本邸案を足がかりに、さらに街区を創えて連続する襲上に、近代都市への文字通り読み解きとして「集まって住まう環境」が連なることを想像します。



2024年度修士設計
襲上の透明なイエ - 現代都市に集まって住まうことについて -
設計・制作
法政大学大学院 デザイン工学研究科 建築学専攻
赤松佳珠子研究室 宮澤源